

題名：EXISTENCE

劇団：劇団ORIGINAL COLOR

作者：佐藤弘貴

CAST

安本 恵（まだ新米のアナウンサー。テレビジャパン所属。24歳くらい。）

藤堂 美咲（マッドサイエンティスト。科学・医学・化学・地学・心理学に詳しい。30
手前？）

ボン・グッピー（お笑い芸人。テレビの経験は浅い。23歳。）

田辺 ミミ（女子大生作家兼コスプレ女王。21歳。）

山崎 悠司（若い俳優。まだ再現Vとエキストラしか経験なし。22歳。）

D・大久保（テレビジャパンディレクター。親のコネ？年齢不詳。若いがしっかりした女性。）

川島 利香（記憶が無いという謎の女性。年齢不詳。見た目は26歳くらい。）

傍観者（黒い服装に身を包んだ謎の人間（？）年齢不詳。）

客電がおち、客入れ音が一度盛り上がりF・O。

傍観者と利香が板付き。

傍観者「存在。存在。皆さんは今、呼吸をしましたね。ですが皆さん、それをどうやって証明しますか？」

皆さんがここにいること。それはどうすれば証明できるのでしょうか？」

例えば・・・それは痛みでしょうか？皆さんが今、自分の腕を切り刻めばあなたが生きている証明になるのでしょうか？」

利香「いいえ、それは違います。そこにある痛みがリアルなものだとは言いつれませんが。」

傍観者「では話題を変えましょう。テレビの中に映る見慣れない風景。それは、自分が存在したことのない場所。例えば海外です。

・・・アメリカは本当にあると思いますか？」

利香「あります。アメリカはあります。」

傍観者「なぜ？」

利香「アメリカに友人がいるからです。」

傍観者「その方は本当に存在していますか？」

利香「しています。」

傍観者「なぜ？」

利香「私と握手をしたからです。」

傍観者「本当ですか？」

利香「本当です。」

傍観者「なぜ？」

利香「温もりです。未だにその友人の手の温度を、私は忘れていないからです。」

傍観者「ではどうやらアメリカは存在するようですね。」

利香「そのようです。」

傍観者「つぶやきシローを知っていますか？」

利香「知ってます。」

傍観者「彼は存在したと思いますか？」

利香「わかりません。」

傍観者「そうですね。彼は存在しなかったかもしれません。」

利香「ええ。」

傍観者「何年前、『志村けんが死んだ』というドラマが流れました！」

利香「あれは驚きました。」

傍観者「今では立派に存在していますね。」

利香「はい。」

傍観者「ではあなたは・・・存在していますか？」

利香「わかりません。昔ははっきりと存在していました。でも・・・」

傍観者「・・・でも？」

利香「今はよくわからないんです。」

傍観者「よくわからない・・・よくわからない・・・では少しはわかっているんですね？」

利香「はい、少しはわかっています。」

傍観者「あなたの理想は、憧れは、想いは・・・どこにあるんですか？」

利香「どこにもありません。」

傍観者「どこにも・・・ない？」

利香「ええ、だって、記憶がないんですから・・・」

軽快なM。照明派手に。

皆が出てきて舞台美術にかかっている布を取る。

傍観者「劇団ORIGINAL COLOR旗揚げ公演！！」

皆『「Existence--」』

徐々にM下がる。照明落ち着く。

司会の女。ボン。藤堂。田辺。が残る。

なんか、番組が始まる感じのM。

司会の女性「いよいよ始まりました！！ハイパーテレビスペシャル『人を救う賢者達！！』

完全に心を無くしてしまった一人の女性。

彼女の心を救えるのは一体誰なのかぁ！！??

司会はテレビジャパンアナウンサー、安本恵です！！」

ボン「ちよっとちよっと恵ちゃん！！深夜枠なんだからそんなに気合入れなくていいんじゃない？」

安本「そういうわけにはいきません！！一人の女性の心がかかっているんですから！！」

ボン「だってそんな真面目に仕事されちゃ、僕ら笑いとりづらいじゃない。あ、紹介してよ！！」

安本「え？あ、はい。それではゲストを紹介します！！お笑い芸人の『ボン・グッピー』さんです！」

ボン「ボンーン！！グッピー♪よろしくお願ひしまゝす！！」

S・E（拍手）

藤堂「まったく・・・お笑い芸人つてのは五月蠅くすることが仕事なの??」

ボン「藤堂さん！！そりやないっすよおゝ。」

藤堂「そりやあるのよ！！ホント、こんな深夜に生放送なんて・・・お肌の敵だわ・・・」

ボン「それは科学の力で治せないんですか？？ドクター藤堂??」

藤堂「余計なお世話よ！・・・恵ちゃん！」

安本「は、はい？」

藤堂「・・・紹介。」

安本「あ、すみません！！えゝ、いまやバラエティーに引ッ張りだこ！華麗なマツドサイエンティスト・藤堂美咲さんです！！」

S・E（拍手）

田辺「えゝ・・・と。そろそろ喋ってもいいですかあ??」

安本「あ、はい！どうぞ。」

田辺「照明さん！！」

照明、田辺にスポット。（できれば。）

田辺「現役女子大生にしてベストセラー作家！著書『完璧な人』はなんと100万部を突破！！」

ロリータの姫としてもその世界ではカリスマ的存在!!

芸能界もちゃっちゃと牛耳ってやります♪田辺 シミでっす！皆よろしくっ♪」

S・E (拍手)

藤堂「よくもまあ、自分であそこまで言えるわね……。」

ボン「お、恐ろしい……。」

田辺「安本さん。」

安本「はい？」

田辺「……紹介。」

藤堂「あんた全部言っちゃったじゃないの!!」

田辺「あ、ごめんなさい。私の悪い癖なんです。なんでこうも、全てを完璧にこなしてしまうのかしら。」

藤堂「一生言ってなさい!!」

安本「あの……続けさせていただいてもよろしいですか??」

ボン「もう、どんどん行っちゃって。」

安本「はい。え、まずはこの番組『人を救う賢者達!!』ですが、それは1ヶ月前テレビジャパンあての一通のメールから始まります。VTRをどうぞ。」

照明が変わる。M2・IN。

スタッフ役の山崎 悠司がPCを持って出てくる。

山崎「え?これは……。」

利香、上手に登場。

利香「私の文字が読めますか？私は、ちゃんと存在していますか？」

山崎「テレビジャパンには『お悩み目安箱』というメールボックスがあります。普段は借金や健康・イジメやセクハラに関する内容がほとんどなのですが、このメールは何かが違っていました……」

『文字は……ちゃんと読めますよ？どうなさったんですか？』

利香「私には、記憶がないんです。理想も憧れも想いも……私の中に存在していないんです。」

山崎「記憶がない……。存在しない……。理想も憧れも想いも……。借金やイジメの悩みなら、そこに何がおきているのか何となく想像がつきます。」

しかしこの女性の悩みは、テレビジャパンのスタッフの想像を超えていたのです。」

利香「私には存在するものがないから、私は存在しないのです。」

利香、上手へはける。

山崎「彼女が今、どういう状況にあるのか？解決策は何処にあるのか？早急に会議が開かれました。」

D・大久保。上手から山崎の方へ歩み寄る。

D・大久保「なるほど、なかなか面白そうな企画じゃない。」

山崎「はい！著名人をお招きして、その女性と対談してもらおうんです！奇跡の瞬間を生放送で！どうでしょう！！？」

D・大久保「いいでしょう！やってみましょう！！」

山崎「……はい！！」

D・大久保、上手へはける。

山崎「こうして、その女性を救う企画『人を救う賢者達!!』の企画が始まったのです。」

山崎、上手へはける。

照明変わる。M2・F・O。

ボン「なるほど・・・いや、記憶がないってのは凄いなあ・・・」

藤堂「記憶がない・・・存在・・・。いったい何が原因なのかしら・・・。」

安本「えー、この女性。仮にAさんとしましょう。テレビジャパンに届いたAさんからのメールによると、彼女はどうかやら記憶を失ってしまったようなんですね。」

田辺「うーん・・・そこで私が呼ばれたわけですね？」

藤堂「私達!ね。」

安本「はい。科学の粋を極めた藤堂さん。そして『完璧な人間』を詠う田辺さんのお力でこの難しい問題がどう変化していくのか?そういった企画なんです。」

ボン「うん。で、俺は?」

間。

安本「えー、ここでもう一人、強力な助っ人を用意しております。」

ボン「無視かよ!??俺は?俺はいったいなんなの?」

安本「・・・はい。その助っ人とは、こちらです。(PCを指す。)」

ボン、床にビタン!!とくつついて、尺取虫のような動きで無言の抵抗。

安本「このPCは、最近話題のサイト『占いのラビリンス』に繋いであります。皆さんはご存知ですか?」

藤堂「ええ、必ず当たると評判の占い総合サイトね。」

田辺「意外〜。科学者の藤堂さんでも占いなんて信じてるんだあ〜。」

藤堂「信じてるなんて一言も言っていないわ。格好の研究材料として認識しているだけよ。」
田辺「ふ〜ん。」

ボン・急に起き上がって客目線で決めながら。

ボン「わかったぞ〜!! Aさんの情報をそのサイトに入力し、解決策を探ろうって言うんだな〜!!」

安本「・・・つまり今回は、科学・思想・占い・の三つの観点から問題の解決を目指します。」

ボン・なんだかマイムをしますが、結局倒れて尺取虫。

安本「果たして賢者達は記憶をなくした女性・Aさんを救えるのでしょうか!?!?・・・一旦CMです。」

CMへむかうような音楽。

照明変わる。

山崎が板チョコを持って登場。隣に傍観者。

軽快なバックミュージック。

山崎「お菓子のロッチから出ました! 『電撃チョコレート!』」

傍観者「一口食べれば体中に激痛が!!」

山崎「これで皆さんも存在認識度UP!!」

傍観者「自分を見失った皆さん♪是非お試しを!!」

山崎「新発売だよ♪」

二人で唄『電撃チョコレート♪ロッチ♪』

音楽終り、照明変わる。二人、そそくさとはける。

何時からかモニターを見ている皆。

ボン「こんなCMあったっけ？変なモンが流行るもんだな・・・」

田辺「ボンちゃんもそう思ったあ？可笑しいよねえ。」

ボン「ボンちゃんって・・・。」

痺れを切らしたかのように、藤堂が立ち上がる。

藤堂「ちょっとディレクター！？？出てきてちょうだい！！」

安本「どうしたんですか！？？」

藤堂「あなたに言ってもしょうがないことなの！ディレクター？」

D・大久保。上手から出てきて駆け寄る。

D・大久保「なんででしょうか！？？」

藤堂「あなたがディレクター？」

D・大久保「はい。」

藤堂、名札を見て。(一度名札を掴んで、指で跳ねたり。)

藤堂「大久保さん・・・ね。覚えておくわ。」

D・大久保「ありがとうございます。え・・・ご用件は？」

藤堂「ええ。あのね、あんまりこんなこと言いたくないけどね。セット・・・酷すぎない？」

D・大久保「いや・・・これはごめんなさい。まあ・・・深夜ですから。」

藤堂「深夜だったって・・・パイプ椅子ってのはいくらなんでも・・・」

ボン「あ、本当だ！！緊張してて全然気づかなかった！！」

田辺「ボンちゃん、緊張してたの！？」

ボン「いや・・・テレビは慣れてないもので・・・」

田辺「そうだよねえ。ボンちゃんやっと最近売れてきたんだもんねえ♪」

藤堂「ううん！！（咳払い）」

ボン・田辺、黙る。

D・大久保「一度組んでしまったセットは簡単には変えられません。今日のところは・・・」

藤堂「だからってねえ・・・」

D・大久保「申し訳ございません。CMあけま〜す！！」

CM終りの音楽とともに皆席に戻る。

藤堂も仕方なしに座る。

音が終わると同時に暗転。

静かに明転。

傍観者と利香・板付き。

傍観者「面白いことが始まりましたね。」

利香「面白いですか？」

傍観者「見ている分には。」

利香「面白い・・・」

傍観者「あなたは面白くないですか？」

利香「記憶がないので、なにが面白いかわかりません。」

傍観者「アメリカに・・・友人がいるんですよ？」

利香「います。でも・・・。」

傍観者「でも？」

利香「誰かはわかりません。」

傍観者「わかりませんか・・・。」

利香「わかりません。」

傍観者「でも、温もりは・・・。」

利香「残っています。」

傍観者「そうですか・・・。」

藤堂・田辺・安本・D大久保・ボン、スツ・・・と静かに入ってくる。

利香「・・・アメリカは・・・ありますよね？」

傍観者「あるんじゃないんですか？」

利香「志村けんは・・・いますよね？」

傍観者「いるんじゃないんですか？」

利香「つぶやきシローは」

傍観者「いません！・・・おっと失礼。」

利香「いえ・・・。」

傍観者「さあ、そろそろ行かなければ。」

利香「何処にですか？」

傍観者「その、面白い場所にですよ。」

利香「なぜ？」

傍観者「あなたを待っているからです。」

利香「・・・。」

安本「では、登場していただきましょう！！記憶を無くしてしまった謎の女性。名前もまだわかりません。今はAさんとお呼びしましょう・・・Aさんです！！」

利香・上手へ走ってはけてしまう。

傍観者・追ってはける。

安本「・・・Aさん！！どうぞ！！」

間。D・大久保、上手へ探しにはける。

安本「・・・Aさん??？」

照明・明るくなる。

安本「・・・あれ？」

藤堂「ちよっと、どうなってるの?」

ボン「Aさん??？」

首をかしげる田辺。

D・大久保、上手からIN。でっかいカンペをかかげる。皆、前を集中的に見る。(カンペがあると思って。)

カンペの内容1「どこにも」

カンペの内容2「Aさんが」

カンペの内容3「いない・・・」

間。皆凍りつく。

D・大久保、4枚目を掲げる。

カンペの内容4「ごめんちやいΣp(ゝε・o)イエイ☆」

皆、こける。

D・大久保探しに上手へ掃ける。

安本「・・・と、その前に!!」

ボン「な・な・なんだあ!!まだだったのかあ♪」

藤堂「も、もう!ひっばるんだからあ♪」

田辺「これだからテレビってやあねえ♪」

間。三人、安本の方を見る。

安本「えく・・・」

ボン「うん!!」

安本「とく・・・」

藤堂「ええ!!」

安本 「ほく・・・」

田辺 「んく??」

安本 「ゲストの皆さんのコントをご覧ください!!」

三人 「はあく!!??」

安本 「さあ!どうぞ!!」

藤堂 「いや、そんな・・・」

安本 「ほれ!!」

田辺 「ほれって・・・」

安本 「まずは、ボン・グッピーさんです♪」

ボン 「ええく!??」

藤堂 「ほ、ほら!いいからやりなさいよ!!」

田辺 「ボンちゃん!!頑張れく!!」

ボン 「ボ、ボン・グッピーの失礼なショートコント!『遺影』」

ボン (母) 「いいかい?勝。お父さんの葬式だからって、決して泣いちゃ駄目よ?」

ボン (勝) 「うん。」

ボン (母) 「父さん、勝の笑顔が一番好きだったんだからね。」

ボン (勝) 「わかったよ母さん!」

ボン (母) 「これがお父さんの遺影よ。」

ボン (勝) 「イエイ♪」

ボン 「ボン!グッピー♪」

間。

藤堂「……やばいわよう。」

田辺「ボンちゃん……放送できないよ……。」

ボン「そりゃないよ！じゃあじゃあ、二人も参加してよ！！！」

ボン、二人の腕を引っ張って前へ出る。

藤堂「え？ちよつと！！！」

田辺「やだく！！！」

ボン・安本も引っ張ってきて。

ボン「恵みちゃんもだよ！！！」

恵「えく！！！？？」

四人並んで一瞬固まる。皆、誤魔化し笑顔。

ボン「あ、えく、ショートコントく……。」

田辺「早く！！！」

ボン「松田優作！！！」

田辺「先生く。この問題わかりませくん。」

ボン「え？松田優作……。」

藤堂「お手洗いは何処じやったかのう？」

ボン「いや、関係な……。」

安本「あなたは神を信じますか？」

ボン「ちよつとちよつと！」

皆、繰り返しながら、ボンに近寄る。

ボン「もつ、なんじゃこりやく！？」

皆「あ。(できた！って表情。)」

ボン「人を！」

田辺「救う！」

藤堂「賢者達！」

安本「と、アナウンサー！」

皆、決める。

急に和やかな雰囲気。

ボン「今のフリよかったよ。」

藤堂「そうかしらあく？」

田辺「お婆さん似合いますね。」

藤堂「いやあくねえ♪もう！」

安本「え、続きました。」

ボン「まだやるの！？？」

安本「アニマル浜口。」

3人「えく！？？」

だんだん暗転。

安本「ほうらボンちゃん、人参よろ。」

田辺「椎茸！あくん！！」

藤堂「はぁい！江頭2：50♪」

ボン「嫌いだく！！嫌いだく！！嫌いだく！！」

完全暗転。

ボン「人を！」

田辺「救う！」

藤堂「賢者達！」

安本「と、アナウンサー！」

CMに入る音楽。

明転C・I。

それぞれ疲れてる。

田辺「つかれたあく・・・」

安本「生放送でコントなんて・・・初めてですよ・・・。しかも20分も。」

ボン「そりやそうだよ。芸人の俺だっぺないんだから。」

藤堂「でもあれよね。田中邦衛はまずかったわね。」

安本「そうですか？」

藤堂 「いらっしやいませ〜、女将の美智子です〜。モノマネ『ホテル』って、旅館だもの。」

田辺 「あく！確かに。まだまだ勉強が足りませんね〜。」

ボン 「ってか、どうするんですか？」

安本 「何がですか？」

藤堂 「ねえ♪」

田辺 「あはは☆」

ボン 「いや、番組ですよ！当の本人がいないんじゃないやあ・・・」

藤堂 「あく！そうよ！そうだったわ！」

安本 & 田辺 「きゃ〜！！」

ボン 「本気で忘れてるし・・・」

藤堂 「ディレクター！え〜と・・・小久保さん！！小・久・保さん！！」

上手からD・大久保IN。

D・大久保 「わざとらしく間違えないでください・・・」。

藤堂 「いた！ちよつと、え〜と、久保さん！」

D・大久保 「大久保です。」

藤堂 「ああ、大久保さん。どうなってるの！？」

D・大久保 「大丈夫です！これから5分間はCMでつながんで。」

藤堂 「そうじゃなくって、いたの！？？」

D・大久保、ゆっくりカンペをとりだして（スケッチブックを一枚ずつめくる。）

1 「い」

2 「ま」

3 「せん+。∴、（*▽）ノ。∴+。」

藤堂「これはもういいわよ！全くどうなってるの？セットはポロポロ、出演者は失踪！（ふてくされて座る）」

安本はPCをいじってる。

田辺「結局いないんだ。∴∴記憶をなくした女性∴∴存在まで消えてしまったのかしら∴∴。」

ボン「ずいぶん冷静だね。」

田辺「いや、焦ってもしょうがないかなって？」

ボン「確かに∴∴。」

D・大久保「とにかく、しばらくはCMで誤魔化せますから！」

ボン「CMねえ∴∴（モニターの方を見る。）」

照明変わる。

綺麗な音楽。

傍観者と山崎上手からIN。

山崎「忘れたくない。」

傍観者「もう、何も失いたくない。」

山崎ノートを取り出す。

山崎「超ノート型パソコン。N O - L I G H T。」

傍観者「あれも、それも、これも、どれも……」

山崎「すぐに更新してください。」

傍観者「もう、失いたくないから……」。

山崎「NO－LIGHT。サニー……」

照明変わる。音、消える。

山崎と傍観者はける。

ボン「これも見たことがないCMだな……」

田辺「うん……私もそうおもった。」

D・大久保「サニーにロッチ。一流企業がスポンサーなんですよ？」

ボン「うん。でも……」

D・大久保「でも？」

ボン「なんで同じ役者ばかりなんだ？」

D・大久保「え？……」

藤堂「そうよ……そうよねえ？しかも片方のこは、さっき再現Vに出てなかった??」

田辺「あ！本当だ！！」

D・大久保、周りを見て。

D・大久保「ちよっと待ってください！！」

安本も手を止める。

藤堂「何よ？びっくりするわね・・・」

D・大久保「何かがおかしいと思いませんか？」

ボン「なんだよ、何かって？」

藤堂「おかしいのはこの番組よ。」

D・大久保「そうなんです。この番組は・・・おかしい・・・。」

ボン「どうしたの？」

藤堂「言いづらいことがあるなら、カンペにでも書きなさい。」

田辺「(気づいて) そんな・・・(硬直)」

ボン「だから何が!?!」

田辺「嘘・・・」

藤堂「ちょっと、ミミちゃん？」

田辺「カメラが・・・一台もない。」

ボン&藤堂「え？」

M、I N。

「え？」でボンと藤堂は正面を見る。安本だけは少し遅れて前を見る。

暗転。

M、F・O。

傍観者板付きの明転。

傍観者「ここで一旦中断しましょう。さあ、皆さん出てきてください。」

キャスト全員出てくる。

傍観者「この舞台の題名『existence』。日本語に訳すと『存在』です。

今この瞬間から、ここは精神の会話スペースになりました。

今ここに居るかれらは、彼ら自身の記憶たちです。

これから彼らに、『存在』というものを議論して頂きたいと思います。・・・どうぞ。」

M・I・N。（不思議で静かな感じの曲。浮き沈みする泡のような。）

皆、口をもごもごさせたり、ジェスチャーで何かを伝えようとするが声がでない。

傍観者『パン』とてを叩く。それと同時に皆、ゆっくり脱力する。

傍観者「おっと失礼。今彼らは、彼らの『記憶』でしかありません。言葉を与えてあげましょう。」

傍観者、歩きながらそれぞれの前で指を『パチン』と鳴らす。

鳴らされた人は、ふっといい姿勢になり真っ直ぐな目。

傍観者「さあ、どうぞ。」

安本「なぜ私がここにいるのか。」

藤堂「なぜ生まれてきたのか。」

ボン「何兆分の一の確立で。」

田辺「なぜここに立っているのか。」

山崎「なぜそれが今なのか。」

D・大久保「急に怖くなることはありませんか？」

利香「怖いです。・・・とても怖いです。」

傍観者、『パンツ』と手を叩く。皆脱力。

傍観者「もつとリラックスしていいんですよ？」

傍観者『パンツ』と手を叩く。皆自然体で立つ。

藤堂「存在を認めること。それを許すのが一番難しいのは、自分自身だと思います。」

安本「自分自身？」

藤堂「私は自分に満足できない人間なのです。」

D・大久保「先生は素晴らしい功績の持ち主でしょう？」

藤堂「私の中学時代の成績表はオール3でした。」

ボン「意外ですね。これほどの才能の持ち主が……。」

藤堂「だから私は様々なことを努力しました。」

山崎「様々なこと……。」

藤堂「何時の間にか、世界の石の種類や亀がどう進化してきたか……。ずいぶんマニアックなものに詳しくなっている自分がいました。」

でもそれは、ほんの少しだけ自分を満足させてくれたんです。自分を褒め、存在を認識することができたんです。」

田辺「私はその逆です。成績は全て5でした。」

藤堂「素晴らしいわ。」

田辺「それとともに大きくなる周囲の期待がありました。」

安本「大事なことです。」

田辺「表面を完璧にしようと、様々なことを考えました。」

ボン「表面・・・ですか。」

田辺「数字なんて紙の上だけのものです。」

D・大久保「そうかもしれませんね。」

田辺「しかし、自分の本当の存在はそれを隠すコスプレのなかにしかありませんでした。」

山崎「なんとなくわかります。僕の成績は1〜5まで揃っていました。」

田辺「器用ですね。」

山崎「その逆。不器用なんです。」

D・大久保「不器用？」

山崎「不器用にしか生きれないから、俳優になったんです。」

藤堂「なぜそうなるの？」

山崎「不器用だから計算ができません。でも、心はしっかりあるんです。」

安本「心・・・。」

山崎「不器用さは温かさです。それは舞台上で光ります。」

ボン「俺はその逆の闇です。成績はオール1でした。」

山崎「成績・・・引っ張りますね。」

ボン「いつの頃からか、その『1』という数字を誇るようになったんです。」

田辺「何故？」

ボン「皆が見下せる存在になったからです。」

安本「見下せる存在？」

ボン「皆が笑い、見下す存在。それこそが道化の属する闇なんです。」

藤堂「なるほど・・・」

ボン「一見自虐的ですが、それが俺の存在の置き場だったんです。」

D・大久保「私には光も闇もありません。成績は忘れしました。」
ボン「それはいい。」

D・大久保「私は沢山の者を失いました。」

田辺「いったい何を？」

D・大久保「沢山引越しをして、何度も一人になりました。」
藤堂「辛いことね。」

D・大久保「最後は、家族もバラバラになりました。」
安本「孤独は不幸ですね。」

D・大久保「だから私はカメラで撮っておきたいんです。そこに私はいなくてもいい。なにかをちゃんと残したいんです。」

山崎「さあ、あなたの番ですよ？」

利香「私は何も語れません。」

ボン「なんで？心を開いてごらんよ？」

利香「私には記憶がないんです。」

D・大久保「あ・・・そうか・・・。」

利香「記憶がない人間は、何処に存在しているのでしょうか？」

藤堂「難しい問題ね。」

利香「私は・・・どこにも存在していない。」

安本「それは違います。」

利香「なにが違うと言うんですか？」

安本「何故あなたは志村けんやつぶやきシローを知っているんですか？」

利香「それは・・・」

ボン「どういうことですか？」

安本「彼女は、志村けんやつぶやきシローの存在をしっかりと覚えてるんです。
藤堂「本当なの？」

利香「・・・はい。覚えています。」

D・大久保「それはなぜ？」

利香「自分が好きだったものは覚えているようなんです。」

田辺「好きだったって、つぶやきシローが？」

山崎「ちょっとそれはありえないですよねえ」

藤堂「今や存在感ゼロだし。」

利香「好きだったんです！」

D大久保「そんなこといってもねえ。」

ボン「あんまり尊敬できないなあ。芸人として。」

田辺「別段面白くないしねえ♪」

利香「おゝもゝじれゝもゝんはおゝもゝじれゝんだあ→(なまりってことね。)(」

M・ストップ。&間。

山崎「えっと……。」

田辺「その……。」

D・大久保「せえの！」

安本以外「ごめんなさい！」

利香「あ、いえ……こちらこそ……。」

間。

安本「あの……。」

ボン「うん!!」

安本「私思うんです。」

田辺「何を？」

安本『『記憶』って2種類あると思うんです。』

藤堂「2種類……どういうこと？」

安本「体に残る記憶と心に残る記憶……。」

M・I・N。

D・大久保「体に残る記憶と心に残る記憶……。」

安本「体に残る記憶は、体の細胞に刷り込まれた記憶。」

山崎「痛み」

田辺「色」

藤堂「味」

ボン「音」

D・大久保「温度」

安本「心に残る記憶は、ハートに届いた記憶。」

山崎「嬉しかったこと」

田辺「楽しかったこと」

藤堂「悲しかったこと」

ボン「苦しかったこと」

D・大久保「そして・・・温度。」

山崎「温度？温度は・・・」

安本「いいえ、温度も。体に温度があるように、心にも温度があるんです。」

山崎「心の温度・・・。」

安本「心の温度が上がった出来事。それは決して忘れません。彼女にとっては志村けんもつぶやきシローも心の温度を上げてもらった大事な人なんでしょう。」

利香「そうです。小さい頃沢山笑わせてもらった志村けん。同じ生まれ故郷のつぶやきシロー。どっちも大切だったんです。」

安本「心の温度は記憶と強く結びつきます。握手をしたアメリカ人も・・・きっと・・・。」

利香「・・・ちよっと待ってください。なぜあなたはそのことを知っているんですか？」

D・大久保「どういうことですか？」

利香「他の皆さんは、志村けんやつぶやきシローのことを知りません。」

ボン「そのくらい知ってますよ。」

利香「いえ、そうじゃなくて。私はその二人を覚えていることを知らないでしょう？」

田辺「あ、そうだ・・・。」

山崎「じゃあ・・・なんで？」

藤堂「・・・恵ちゃん？」

S・E 『キーン』というような、高い音、皆頭を抱えだす。
安本は平気。

田辺「なにこの音!!?」

ボン「頭が・・・!!」

傍観者「ストロップ!!」

音消え、全員脱力。

傍観者「そろそろ限界のようですね。空間が歪みはじめました。
さあ皆さん。元の場所へ帰りましょう！」

安本・藤堂・ボン・田辺・D大久保は元の位置（スタジオ）に戻る。
傍観者・利香・山崎ははける。

スタジオの4人は遠い目（取り付かれているような）

照明がゆっくりスタジオの照明に。

不思議な和音(?)のような音が鳴り、それもゆっくり消える。
最初に藤堂が気がづく。他の人間は遠い目。

藤堂「え?・・・」。

藤堂、顔を覆うような仕草（寝ぼけてるような感じ。）

横を見て、皆がポケットとれていることに気がつく。
皆を起こす。呼ばれた人も何が起きているかわからないけど、はっと起きる。

藤堂「ちよつと・・・ミミちゃん?ボン君！」

起きた人は「あれ?」とか「うん・・・」などとダルそうな感じ。

上手端で座り込んでいるD・大久保。

藤堂「大久保さん!!」

大久保「あ、はい・・・」

藤堂「恵ちゃんも大丈夫!??恵ちゃん!」

安本「人は、目を開けながら眠るとどんな夢をみるんでしょうね?」

藤堂「ちょっと・・・何言ってるの??」

安本「布団の温もりの中で見る天井は、どんな場所になるんでしょう?」

ボン「だったら俺は、天井よりも夜空の方がいいな!!」

藤堂「ボン君!!」

ボン「大丈夫ですよ、藤堂さん。せっかくだから色々な話をしましょう。」

藤堂「でも・・・番組は!??どうするの!??」

田辺「・・・番組・・・カメラ・・・カメラはどこに行ったの!??」

D・大久保(座ったまま)「その心配はありませんよ。ここにはカメラもなければ、スタッフもないじゃありませんか。」

藤堂「え?」

D・大久保「思い出してください。私達は今日、一体どうやってここに来たんですか?」

田辺「そんなの!マネージャーが・・・あれ?」

ボン「ミミちゃん。俺さ、今のボーっとしてる時間に沢山考えたんだ・・・どうやっても思い出せないんだよね。」

自分の『存在』がさ。」

藤堂「ボン君、どういうこと？」

ボン「自分が自分であることは確かだ。でも……今までの記憶があんまりないんだよね。ああ、あんまりってのはさ、自分が自分であること……つまり、自分の夢とか趣味とかは思い出せるんだ。」

だから俺は俺なわけ。だけど、友達や家族のことは全然思い出せない。」

藤堂「そんなわけないでしょ!？」

D・大久保「じゃあ、思い出してみてください。」

田辺「思い出せない……。確かに覚えていないわ……。」

藤堂「そんな……。なんで……?」

安本「あ、でも。自分が大好きな人のことは覚えているかもしれませんよ?」

ボン「お、誰か思い出したのかい?」

安本「顔は思い出せないの。でも、氷川きよし……って名前は思い出せるの。」

D・大久保「氷川きよし……きつと素敵な方なんですネ。」

田辺「じゃあ、私も思い出してみろ!!!……あれ?……聞こえる……。」

ボン「なんて!???」

田辺「ちよつと待てよ!……つて。」

D・大久保「ちよつと待てよ!つて言う人、きつと素敵な方なんですネ。」

ボン「ほら、藤堂さんも!」

藤堂「え、ええ……。うくん……。」

安本「どうですか?」

藤堂「……私も、名前だけなら……」

ボン「誰ですか？」

藤堂「高木……ブー。」

安本「高木……ブー……。 (感慨深げに)」

ボン「高木……ブーですか。(にこやかに)」

D・大久保「高木……ブー……。きつと素敵な方なんです。」

安本「あれ？ちよっと待ってください!!」

田辺「どうしたの？」

安本「私達は、お互いのことは覚えていますよね！」

ボン「うん……それで？」

安本「つまり、ここに居る全員のことには覚えているんです。」

D・大久保「うん……うん。確かにそうですね。」

安本「でも……もう一人だけ覚えている人がいませんか？」

田辺「もう一人……」

藤堂「あ！再現Vの人!!」

M・I N。

安本「そう！もしかしたら、どこかに居るかもしれません!!」

ボン「よし！探そう!!」

D・大久保「私は、ここを見張ってます!!」

全員頷いてはける。

ボン(前)・藤堂(後)は下手。

田辺・安本は上手。

D・大久保、部屋のを色々と触ってみる。全てが張りぼて。

D・大久保「私達は・・・一体どこに居るの?」

上手から藤堂IN。

D・大久保「藤堂さん!」

藤堂「だめ。誰もいない。」

D・大久保「そうですか・・・。」

藤堂「しかも・・・、あっちには出口もないわ。」

D・大久保「え?」

藤堂「窓一つない空間よ・・・。」

田辺IN。

田辺「何もなかった・・・。」

藤堂「出口は!?!」

田辺「いや・・・どうしたんです?」

D・大久保「(下手の前を見て。)きっと向うに!!」

ボンIN。

D・大久保「ボンさん！！出口は！??」

ボン「え？いや・・・まさか・・・」

藤堂「出口が一つもないわ。」

田辺「そんな・・・。」

藤堂「完全に閉ざされた空間よ。そこに・・・私達だけ。」

安本、上手から顔を出して。

安本「あの・・・。」

皆一斉に振り向いて、M。C。O。

安本、山崎を引きずって出てくる。

安本「こんな見つけましたけど。」

山崎「痛いイタイいたい itai-!」

安本、放す。山崎咳き込む。

皆「あ〜っ!!」

藤堂「その前に、出口はあった!??」

安本「出口?いいえ。」

ボン「まいったな・・・。」

安本「どうしたんですか?」

D・大久保「出口が・・・どこにもないんです!」

田辺「ここは・・・一体どこなの!??」

ボン「ミミちゃん!!落ち着いて!!!」

田辺「だって・・・だって!!」

ボン「ミミちゃん!!」

山崎「あの・・・」

皆「あ。」

D・大久保「すっかり忘れてましたね。」

藤堂「あなたは誰!？」

山崎「いや・・・誰って言われましても・・・」。

藤堂「今まで何をしたの!？」

山崎「いやあく・・・寝てました」

ボン「寝てた!??」

安本「本当です。私がたたき起こしました。」

山崎「んで、びっくりして逃げ出して・・・」。

藤堂「なんで逃げたの!？」

山崎「え?だって、凄い顔の人が目の前で叫んでるから・・・」。

安本「そんなことしてません!!」

山崎「では、再現Vをどうぞ!」

安本、上手端へ走る。

山崎倒れて寝る。

他の皆は、後ろへ下がる。

安本「何にもないなあ〜・・・はっ!!」

駆け寄って。襟を掴んでシェイクシェイク。

安本「起きろ〜!!起きろ〜!!起きろ〜!!」

山崎「はっ!!」

安本手を止める。

間。

山崎「ぎゃ〜!!」

安本「ぎゃ〜!!!!」

二人あたふたして叫びながら駆け回り、山崎が上手へはけ、安本それを追ってはける。

車の音「ぶ〜ん。ききい〜!!ど〜ん!!!!」

安本、山崎を引きずって出てくる。

山崎「と、言うわけなんです。」

安本「ぎゃ♪はずかし♪」

皆こけて。

ボン「なんじゃそりや!!」

田辺「ってか、最後の音はなんなのよ!!」

山崎「音響です。」

藤堂「意味がわからんわ。」

ボン「ま、とりあえず座れ。」

山崎「あ、はい。」

山崎、中央に正座。
皆、周りを取り囲む。

D・大久保「質問します。ここがどこだかわかりますか？」

山崎「わかりません。」

D・大久保「役立たず。」

山崎「ひどくないっすか!？」

ボン「質問します。何故ここにいるんですか？」

山崎「うくん・・・わかりません。」

ボン「くず。」

山崎「いや、くずって!？」

安本「質問します。出口がどこだか知ってますか？」

山崎「知りません。」

安本「うんこ。」

山崎「うんこ!？ちょっと、人を排泄物にたとえるのやめてくれませんか!？」

藤堂「うるさい。」

山崎「あ、はい。すいません。」

田辺「質問します。何か覚えていることはありませんか？」

山崎「・・・いいえ。何も。」

田辺「この、DMが。」

山崎「うわぁ・・・そういうこと言うの止めましょうよ。ちょっとリアルだし。」

藤堂「どうやらこの坊やは、本当に何も知らないみたいね。」

D・大久保「役立たず。」

ボン「くず。」

安本「うんこ。」

田辺「ドM。」

山崎「ちよつと・・・いまどき『うんこ』とかで笑いをとる劇団なんてありますか？」

藤堂「余計なこと言わなくていいの。」

山崎「あ、はい。すいません。」

ボン「八方塞がりか・・・。」

皆ため息などをつきながらぼらける。

山崎も立ち上がって。気まずそうにしている。

山崎「あ、でも・・・。」

安本「どうしたの？」

山崎「皆さんとお会いしたことがあるような気がするんですね・・・。」

ボン「まあ・・・俺達は再現VやらCMやら見てたから知ってるけど・・・。」

山崎「その・・・何か沢山語ったような・・・。」

田辺「そういえば・・・。」

ボン「そんな気も・・・。」

D・大久保「あ！もう一人いませんでした！？」

藤堂「どういうこと??？」

D・大久保「その、皆が語ったって言う場所に、もう一人!!」

田辺「もう一人・・・」

傍観者、上手からひよっこりIN。

山崎「いました。もう一人いましたよ!!」

傍観者、『オレオレ♪』ってジェスチャー。

D・大久保「誰だったかなあ・・・」。

傍観者『こんにちわ』ってジェスチャー。

ボン「女性だ!!」

傍観者『え?』

藤堂「そうね!女性ね!!」

傍観者、がっかりしながらはけて行く。

D・大久保「もしかしたら、それこそAさんじゃないですか?」

田辺「ってことは・・・Aさんもこの空間にいる!」?

山崎「Aさん?」

安本「記憶をなくした女性のことよ。」

ボン「彼女がこの空間を脱出する鍵なのかもしれない!」

安本「でも、彼女はどこにもいなかった・・・」。

藤堂「なにか手はないのかしら?」

田辺「あ、テレビをつけて見ようよ！」

ボン「そうか!!！」

D・大久保「駄目です!!ただの・・・張りぼてでした。」

ボン「くそっ!!！」

田辺「藤堂さん、なんか出来ないの??」

藤堂「何かって??」

田辺「ほら、催眠術とかさ!!！」

藤堂「・・・それだわ!!！」

D・大久保「そうですよ!藤堂さんは催眠術の権威でもあるじゃないですか!!！」

山崎「へへ。じゃあ、それで記憶をたどっていけば・・・」

藤堂「ボンちゃん!!！」

ボン「ボンちゃん!??」

藤堂「椅子を指して(ニニニ)stand up!!」

ボン「sit down じゃなかったかな・・・?」

藤堂「いくわよ・・・!!！」

皆、唾を飲む。

藤堂、5円玉を取り出し揺らす。

藤堂「あんやらく・・・。ゆんられく・・・。はあ!!！」

ボン「わあ!!!(ガクッ)・・・はっ!!・・・そんな・・・嘘だろ!??」

田辺「ボンちゃん……?」

D・大久保「しっ!!」

ボン「全く効果がない……。」

皆こける。

藤堂「そんなバカな……。私の催眠術が効かないなんて……。テレビで失敗したことなんてなかったのよ。」

山崎「たぶん、テレビの力です。」

藤堂「どういう意味よ!？」

山崎「催眠術にかかった人の名前は？」

藤堂「そんな細かい記憶は……。え〜と確か……。あ。出川なんちゃらとか、あとくなんとか竜平とか……。」

山崎「恐らく全員リアクション芸人です。」

藤堂「(耳を塞いで) いやあ〜!!」

皆「あ〜。(納得)」

安本「えと、とりあえず……。また考えましょう!」

皆「うん!」

皆、考える。

山崎、PCの前発見。

山崎「あ〜。」

田辺「どうしたの?」

山崎「このPC。生きてますけど……。」

皆「ええ!???(バラバラでいい。)」

安本と田辺がPCにダッシュ。

安本「そうですよ。これがあったんだあ!占いのラビリンスで調べれば……!」

田辺「ちよつと貸して。」

安本「どうするんですか?」

田辺「占いより、まずはニュースを見てみましょう!」

安本「なるほど……。」

藤堂「どう?」

田辺「……だめ。占いのラビリンス以外にはリンクできないみたい……。」

安本「貸してください!」

間。

安本「……駄目ですね。やっぱりここしかない……。」

藤堂「じゃあ、質問してみましよう?」

安本「はい!」

田辺「ちよつと待って!!」

山崎「どうしたの?」

田辺「占いのラビリンスって確か……一度占ったら5分間は占えないんだよね……?」

安本「あ、そうだった・・・どうします?」

藤堂「まずは今の状態を知らなくちゃ。質問はこう・・・『ここはどこですか?』」

安本、打つ。

安本「出ました!」

ボン「なんて!？」

照明変わる。

安本「あなたは・・・存在してますか?」

暗転。

傍観者と利香の板付き。

明転。

傍観者「そろそろ出て行っても、いいんじゃないですか?」

利香「何故ですか?」

傍観者「あなたを待っているからです。」

利香「だから、それは何故ですか?」

傍観者「疑問ですか?」

利香「私は・・・彼らが誰なのか知りません。」

傍観者「知りませんか。」

利香「知りません。」

傍観者「知りませんか・・・。」

利香「知りませんよ……。何が言いたいんですか？」

傍観者「いえね、それは少し間違っていますか？」

利香「どういう意味です？」

傍観者『知らない』ではなく、『忘れた』のではないのでしょうか。」

利香「それは……。私には記憶がないから……。」

傍観者「そういう意味ではありません。彼らもまた、貴女のことを覚えていません。」

利香「え？」

傍観者「ですが、知っているんです。彼らは……。知っているんです。」

利香「わからない。」

傍観者「逃げないでください。貴女もまた、彼らを知っているんですから。」

間。

傍観者「……。今まですれ違った人間は何人ですか？その人間の顔を覚えていますか？」

利香「きつと数え切れません。覚えているわけがありません。」

傍観者「そう、それを覚えていないと言います。ですが……。知っているんです。」

間。

傍観者「そろそろ出て行っても、いいんじゃないですか？」

利香「……。もうちょっと……。待ってください……。」

傍観者「ではもうちょっと……。待ちましょう……。」

暗転。

場面はスタジオに戻る。皆疲れた表情で板付き。明転。

ボン「質問で質問を返すなんて・・・PCってよくできてるなあ。」

安本「皆さん。次の質問まで3分あります。その間に今の現状を考えて見ましょう！」

田辺「今の・・・現状？」

安本「何故私達がここに居るのか・・・考えられる状況を全て挙げてみましょう！」

D・大久保「なるほど！」

ボン「じゃあじゃあ、思いついた人は挙手で。」

皆「うん。」

ボン「はい。」

山崎「早いな。」

ボン「ミュージック・スタート・・・」

宇宙船の中のようなM・I・N。

ボン。ちよつといっっちゃってる目になって。

ボン「僕らはねえ。宇宙人にさらわれたんですよ。そんでピピッと記憶を消されちゃったんですよ。そのうち変な宇宙人が来て僕らに言うんですよ。ET。ゴートウーヘル・・・ってねえ。」

M・F・O。

ボン「格好つけて）ふう・・・どうですか、僕の推理。」

田辺「藤堂先生！」

藤堂「15点。」

ボン「ええ〜!? 100点中〜?」

藤堂「1000点中。」

ボン「なんでえ〜!?」

藤堂「面白くないもん。」

ボン「それ問題違いますよ。」

藤堂「はい次の人!」

皆、はいはいはい!!! って感じ。

藤堂「じゃあ、再現Vの人。」

山崎「山崎です。え〜と、僕らは夢を見てるんですよ。」

間。

安本「うん。」

D・大久保「それで?」

山崎「おしまい。」

他の皆「先生〜!」

藤堂「0点。」

山崎「なんで!? ありえなくはないでしょ!?!」

藤堂「夢落ちはちよつと・・・。」

山崎「しまったあ〜!!」

ボン「ってかさつきま寝てたじゃん。」

田辺「夢の中で寝るなよのび太。」

D・大久保「ドM。」

山崎「ちよつと・・・僕に対して厳しくないっすかあ〜？」

藤堂「はい次〜。」

山崎なんかリアクション。

皆、手を挙げる。

藤堂「ミミちゃん！」

田辺「はい！え〜と、ここは不思議の国なんですよお。ここを出るには王子様と結婚しなきゃいけないんです！終り！」

間。

藤堂「え〜と・・・なんか可哀想だから60点。一応綺麗な話だし」

ボン「座布団はもらえないけどね。」

山崎「おおぎり？」

藤堂「はい次の人〜。」

皆、挙手！！

藤堂「大久保さん！！」

D・大久保「はい！どつきり！！」

藤堂「うん！シンプル！！70点！！！！次！！！！」

皆、挙手。藤堂も挙手。

藤堂「はい！私！！」

皆、ま・まあね。しようがないかって感じ。

藤堂「ここはね、病院なの。」

M・I・N。照明変わる。

藤堂「私達は精神異常者で、治療を受けているわけ。それなら皆の記憶がないことも、閉ざされた空間にいることも説明がつくわ……。」

安本「なるほど……。」

藤堂「そして私達は監視されているの!!」

皆「ええ!?!?」

藤堂「私達は人間の神秘を研究するための、モルモットってわけ……」

M。C。O。

照明変わる。

藤堂「……どう?」

ボン「いや、結構リアルだと思いますよ。でも……」

藤堂「でも?」

D・大久保「あの、理由もしっかりしてるし、可能性はあると思うんです!……でも……。」

藤堂「だから何!?!」

山崎「あく、でも!!そういう舞台……なんか見たことがあります。」

藤堂「そっちかあく!!」

ボン「まあまあ、次々!!」

皆、挙手!!「一際元気なボン。」

藤堂「うくん……」

皆ボンの勢いに圧倒されて最後はボンだけ残る。

藤堂「はい。ボンちゃん。」

ボン「よっしゃ!!えうと。ここはネバーエンディングストーリーの本の中なんですよ!」

安本「うん。じゃあここはどこ?」

ボン「もちろんファルコンの耳のなかだよ!(モノマネ) バスティアン!耳をかいてくれないかあ?」

田辺「ボンちゃん似てる!!」

藤堂「よし!オーケー!!山田くん!座布団一枚持ってきて!!」

傍観者上手からINして、座布団を持ってくる。

(持ってくる間の芝居。←)

田辺「ボンちゃん!もう一回!!」

ボン「おう!!・・・(顔を作ってから) バスティアン。耳がかゆいよお。」

山崎「似てるな!」

D・大久保「実写版はボンさんできまりですね!!」

藤堂「いや、元が実写版でしょ。」

D・大久保「あ、そっか。」

山崎「つてか、なんでネバーエンディングストーリーは覚えてるのかな?」

田辺「いいんじゃないんですかあ?この際。」

皆和気藹々。傍観者上手へ掃ける。

安本「ちょっと待って!!」

皆、きよとん。

安本「今誰いませんでした!??」

山崎「え?いた?」

D・大久保「いや、気づきませんでした。」

ボン「気のせいじゃないの?」

安本「座布団!!」

藤堂「ええ、座布団ねえ。」

田辺「安本さん。少し疲れてるんじゃないですか?」

安本「誰が持ってきたの!」

間。

皆「あゝ!!!」

D・大久保「誰だろう!誰だろう!??」

山崎「確かに誰かいた気はするんだよなあ!」

田辺「あ!!」

皆「え!??」

田辺「そろそろ占いのラビリン스가!」

藤堂「そうだったわ!恵ちゃん!」

安本「はい!!」

安本 PCく。

藤堂 「今度はこの質問よ！『座布団を持ってきたのは誰ですか？』」

安本 「はい！」

ボン 「そんな質問でいいんですか？」

藤堂 「座布団を持ってきた人間・・・その人がこの空間の鍵を握っているに違いないわ！」

ボン 「確かに・・・。」

安本・PCに入力。

安本 「出ました！・・・あの・・・ちよつとさっきと文章が・・・。」

ボン 「また同じなの？」

安本 「いえ！・・・なんかその・・・」

藤堂 「とりあえず読んで。」

安本 「あ、はい。『僕もあなたも、あなたも皆も。そしてそれは△さんも然り。全て忘れているだけで、ちゃんと知っているでしょう？』」

田辺 「どういう意味かしら・・・？」

D・大久保 「知っている・・・。忘れているだけで、知っている・・・。」

山崎 「つまり僕らは、△さんにも座布団を持ってきた人にも会ったことがあるってことですよね？」

藤堂 「それだけじゃないわ。『僕も』占いのラビリンスはそう答えたわ。『僕も』。つまり、座布団を持ってきた本人。それが占いのラビリンスの正体よー！！」

ボン 「そうか・・・！！」

藤堂「そして、その人間はAさんのことを知っている……。」

D・大久保「どうなってるんでしょう……。」

藤堂「これまでのことを踏まえて、私の見解を話すわ。」

間。

藤堂「座布団を持ってきた人間を仮にBとしましょう。まず私達は、Bに記憶を奪われた……これは間違いないわ。」

田辺「なんで？」

藤堂「さっき私は、『監視されている』と言ったわね。BはAさんのことを知っている。私たちがここにいることも知っている。そして彼はさきほどここに来た。彼が私達を拉致し、記憶を奪って閉じ込めた……。これでつじつまが合うわ。」

安本「あー!!」

山崎「どうしたの？」

安本「文章が……更新されました……。」

藤堂「読んでちょうだい!!」

安本『『おしい。でも安心。細胞はそのまま。だから協力してほしい。皆が同意してくれるのならば、姿を現す。思い出して欲しい。心の温度を。』』

ボン「心の温度……。」

山崎「なんか……ひっかかるな……。」

田辺「心の温度……。」

D・大久保「心の温度……。」

皆考え込むが、なんとなく安らいだ顔になっている。

ボン「そうか……。」

藤堂「え？」

ボン「Aさんは記憶が無い。そして俺らも記憶がない。でも、俺らは知っているはずなんだ！心の温度を……。」

M・N。照明、少し変わる。

皆はボンの言葉をかみ締め、あえて何も言わないでいる。

ボン「俺らは忘れていてるだけで、きっと知ってる。俺には……少しだけ見えた気がする。」

田辺「どんなものが見えたの？」

皆・前の遠くを見る。

ボン「なんとなく、心がふっと温かくなるような……そんなものだよ。」

山崎「忘れていてるだけで知ってるなら……思い出そう。」

藤堂「記憶が無いのにな？（あくまで微笑んで）」

D・大久保「でも、私は私だから。」

ボン「そう、俺は俺だから。きっと……。」

田辺「なんだか、解るような気がする……。」

山崎「なんて例えればいいのか？」

藤堂「そうね……まるで……素敵な夢。」

ボン「ああ、そうだ。起きた瞬間に忘れてしまうような夢。」

D・大久保「でも、なんだか温かい。」

田辺「そんな・・・夢・・・。」

M・IN。

傍観者、上手IN。

安本は傍観者の方を見る。二人はうなづく。

他の皆は遠く前を見ている。

段々薄暗くなる照明。

傍観者「皆、ありがとう・・・。」

安本「ありがとう・・・。」

田辺「あなたは・・・誰？」

傍観者「僕は魂屋。皆の魂をここに招待した張本人。」

ボン「魂屋・・・」

傍観者「魂を管理しているんです。」

藤堂「私達は今、魂なのね・・・。」

D・大久保「Aさんはいるの？」

傍観者「います。でも、その前に紹介したい人間が。」

安本「私は夢屋。この空間を管理しています。」

ボン「恵ちゃんが？」

山崎「じゃあ・・・二人は人間じゃないの？」

傍観者「どうでしょう？ただ、僕らは実在しません。」

安本「でも……存在はしているんです……。」

田辺「実在……私達は？」

傍観者「皆さんがこの空間に慣れるには、多少時間がかかりました。」

安本「そう。だから、急に全てを語るわけにはいかなかったんです。」

傍観者「肉体と魂は持っている記憶が違います。」

安本「それを分離すると、パニックを起こす可能性があるんです。」

傍観者「大丈夫。皆さんはちゃんと実在していますよ。」

田辺「そう……そうだったの……。」

安本「ここは、Aさんの空間です。」

藤堂「なんで私達が呼ばれたの？」

傍観者「人の空間に入るには、ある条件が必要なんです。」

安本「つまり皆さんは、その条件を満たしているんです。」

山崎「Aさんに会ってみたいな……。」

D・大久保「そうね。Aさんに会いたい……。」

傍観者「もうじきAさんはやってくるんです。もうとっくに決断しているんですから。」

ボン「Aさんー！出ておいでよー！」

藤堂「Aさん。大丈夫よ。怖くないんだから。」

音声(利香の声)『私には記憶がないんです。』

田辺「Aさん！あなたにあいたいの。」

山崎「思い出せるかもしれないじゃないか！」

D・大久保「あるいは、忘れてもいいじゃない！」

音声（利香の声）『思い出さなきゃ私は私じゃない。でも私の思い出は、思い出してはいけないの。』

S・E『地鳴りのような音』

田辺「この音は？」

傍観者「恐怖の音だ・・・」

ボン「恐怖の音！？」

安本「Aさん！拒んでは駄目！」

藤堂「恐怖の音って何？」

傍観者「絶望・疑心・不安定・・・そんなものの塊です！」

山崎「Aさん！・・・」

音声（利香の声）『私は、Aさんなんかじゃない。でも、誰でもないの！』

D・大久保「Aさん！・・・」

音声（利香の声）『私は実在も、存在もしちゃいけないの！』

地鳴り、大きくなる。

安本「世界が・・・壊れる！！」

傍観者「駄目だ！！利香さん！！！！」

S・E『鏡が割れるような音。』

暗転。

利香センター板付き。

安本上手板付き。

傍観者下手板付き。

かなり暗い照明。

M。F・I。(不思議で静かな曲。)

皆は後ろで歩く(演出有)

利香「何もない世界で一人。

何を待つでもなく、何を探すでもない。

私という名前を無くして。

私という名前を作りもしなくて。

何もない世界で一人。

目も心も閉じてしまおう。

そこで見る夢もまた何もない。

0という数字だけが私を安心させる。

何もない私を安心させる。

何もない夢だけを見る。」

傍観者「逆ですよ。」

利香「何がですか？」

安本「逆に、沢山ありすぎて困るんです。」

利香「この世界を見てください！私の世界は壊れました！もう・・・戻れはしないんです・・・。」

傍観者「じゃあ何故、皆ついてきているんです？」

安本「皆、時期にこの空間にも慣れて、あなたと再会することになります。」

間。皆バラバラにつぶやき始める『思い出して欲しい。心の温度を。』

利香「きつと駄目です。私はもう、駄目なんです。」

傍観者「大丈夫。皆がちゃんといるでしょう？」

利香「私は・・・死のうとしたんです！！そんな人間には・・・もう無理なんです・・・。」

安本「記憶が戻ったんですか？」

利香「いえ。でも私は、目を覚ました時のことをよく覚えています。私は・・・何もかもを無くそうとしていたんです。」

傍観者「何もかもを無くす？」

利香「そうです。無になろうとしていたんです。」

安本「無とは絶望ですよ？」

利香「私は、『私』という証拠を全て処分していました。身分証もアルバムも・・・自分のアイデンティティーを全て失ったんです。」

傍観者「それがつまり・・・。」

利香「無になるということです。」

安本「きつと、辛いことがあったのでしょうか。」

利香「たぶん、それが絶望だったんです。」

傍観者「では、今は何故ここに居るんですか？」

利香「え？」

安本「今のあなたは、取り戻したいんじゃないんですか？」

利香「絶望を取り戻して何になるんですか？そんなもの・・・いらない。」

傍観者「それは過去の話です。」

利香「ええ。過去は絶望です。でも過去がなければ、私は私じゃない・・・。」

安本「それは違います。」

利香「どう違うんですか？」

安本「だって、あなたは息をしているでしょう？過去が絶望なら、未来は希望です。

沢山の酸素を吸って、笑ったり泣いたりする。それが出来るのは、自分自身だけです！」

利香「だって、私は自分で自分の命を……。」

傍観者「違います!!！」

皆、呟きをやめる。

利香「……え？」

傍観者「死のうとしていたんじゃない。生きるために全てを忘れたんです！あなたは最後に言いました。

『人は、目を開けながら眠るとどんな夢をみるんでしょう？布団の温もりの中で見る天井は、どんな場所になるんでしょう？

でも、夢の中では生きられない。その天井がどんなに暖かい場所になっても。だから私は私じゃなくなっても、私は生きる。

だから私の未来は、希望が存在する未来なんだ。』と。」

利香「……そんな……。」

M.F・O。

安本「さあ、皆と語りましょう？ここにいる皆は、あなたを未来に引っ張っていってくれます！」

傍観者「そう。そのために皆をここに連れてきたんです！皆の魂を！心の温度を上げあった皆を……！」

全員「心の温度を……！」

M・N。照明変わる。皆、いい笑顔で懐かしそうに遠くを見つめる。

ボン「そうか、あんただったのか！覚えてるぜ！！優しいコンビニのお姉さんだ！！俺が高校のとき、泣きながらコンビニに入ったら、ハンカチ貸してくれたよね？それで、手を握ってくれたよね？大丈夫だよ。泣かないで？って……。温かったよ。ありがとう！！」

全員「心の温度を！！」

藤堂「そう、あなただったのね？中学生の私が3ばかりの成績表を眺めてとぼとぼ歩いていたら、小学生のあなたはおはじきくれたよね？嬉しかった……。そして、あなたの手は温かった……。いまでもあのおはじきは持っているのよ。私の大事な宝物……。ありがとう。」

全員「心の温度を！！」

田辺「なあんだ、あなただったんだ！！通学の電車に揺られて、ため息をついている私。その横であなたは『完璧な人間なんていない。そんなもの目指す必要はないじゃない』って話してたよね！私その言葉を聞いて、思わずあなたと握手しちゃったの！だって……。凄く救われたんだもん。」

私の著書『完璧な人』の最後にはこう記されているわ。『よって、完璧な人間はありえない。だから完璧という言葉から距離を置こう』ってね。本当にありがとう！！」

全員「心の温度を！！」

山崎「ちゃんとお顔を覚えていきますよ！俺の初めての舞台。小さな役で台詞は4つ！！」
なおかつ囁んじやって。そんな舞台を見に来てくれましたね。もちろんお目当ては他の役者だったみたいだけど。

舞台が終わって一人凹んでる僕のところにあなたは来たんです。

『あ、あの……。芋虫の役の方ですよ？握手してください！！』なんて。お蔭様で、お

芝居を辞められなくなっちゃいましたよ！
ありがとうございます！！」

全員「心の温度を！！」

D・大久保「お姉ちゃん・・・よくブランコ押してくれたお姉ちゃんだ・・・。
3度目の引越しの後、寂しくて一人遊んでいる私に話しかけてくれたよね？
いつも手を繋いでくれて温かった・・・。
そこには1年しかいられなかったけど、凄く嬉しかった。
ありがとう！！」

全員「心の温度を！！」

利香「でも・・・でも・・・私は何も覚えてない・・・。未来も過去も自分も友達もわからない！結局何も・・・ない・・・！！」

利香うずくまる。

皆・顔を見合わせる。
手を利香の方へ伸ばす。

M・IN。

照明、すっと明るくなる

ボン「なら、握手をしよう。」

藤堂「あなたが私達にくれたように」

田辺「今度は私達からあなたへ」

山崎「心の温度を」

D・大久保「さあ。」

皆「さあ！！」

利香の手を皆で掴む。

皆段々バラバラになって、遠くを見て笑う。

全員「存在。存在。皆さんは今、呼吸をしましたね。ですが皆さん、それをどうやって証明しますか？」

皆さんがここにいること。それはどうすれば証明できるのでしょうか？」

例えば・・・それは痛みでしょうか？皆さんが今、自分の腕を切り刻めばあなたが生きている証明になるのでしょうか？」

利香『いいえ、それは違います。そこにある痛みがリアルなものだとは言い切れません。』

全員「あなたがもし、自分の存在を疑うとき。

その時は誰かと握手をしましょう。そして少し笑って、お互いに心の温度をあげましょう。手の温もりと心の温度。それこそがあなたの存在を証明してくれます。」

(皆沢山の握手を交わす。止まって。)

全員「語れるなら語りましょう。」

ボン「ありがとう」

藤堂「さようなら」

大久保「まだどこかで」

山崎「大好きです」

安本「大切です」

傍観者「生きてください」

田辺「笑いましょう」

利香「愛しています」

全員「可能ならば抱きしめましょう。」

ボン「ありがとう」

藤堂「ありがとう」

大久保「生きててくれて」

山崎「ありがとう」

安本「ありがとう」

傍観者「ありがとう」

田辺「生まれてくれて」

利香「ありがとう」

(皆前に出て手を出す。)

全員「さあ!!」

ボン「あげましょう!心の温度を!」

藤堂「私からあなたへ」

大久保「あなたから私へ」

山崎「心の温度を」

安本「魂の炎を」

傍観者「まるで聖火リレーのように」

田辺「消えることのない」

利香「存在から存在へ」

両手を前に出す。

全員「さあ！！」

間。皆自然体に戻って、利香の方を向く。

ボン「だから君も」

藤堂「もう大丈夫」

D・大久保「ここにいるから」

山崎「君が握手できる存在が」

安本「ここにいるから」

傍観者「だから君も」

田辺「もう大丈夫」

7人、利香に向かって手を差し伸べる。利香、少し戸惑う。
ボンが利香の手を引き、集まって利香のての上に全員手をのせる。
皆、素敵な笑顔。

利香「……ありがとう。」

舞台・暗転して行く。

THE END。。。

著作権について

- ・本ページで公開されている作品の著作権をはじめとするすべての権利は全て作者が保有いたします。
- ・このページからダウンロードできる脚本は全て無料で読んでいただいても結構です。ただし、舞台等で御利用の際は、作者からの上演許可を取っていただくようお願いいたします。
- ・必要に応じての改編等も、作者への許可の上行って下さい。
- ・著作権料が発生する場合、指定された額を作者へ送金を忘れないようにお願いいたします。本作品における著作権料は、下記に示す通りです。

この作品には独自の著作権使用料が設定されています。

完全無料です。が、使用時はご連絡をお願いいたしますw